



集おういのちのサンガ
ちょっと聞いてこ、お寺で話を。

TOKYU HOTELS

しらりん

35

2019/6

女性住職の集い

社会・人権部

真宗大谷派では、1991年に卑属系統ひぞく（自分より下の世代の親族）に男性教師がいなかったことを条件に、女性の住職就任を初めて認めま



した。1996年には条件が撤廃され、住職継承に男女差は解消されました。現在、全国で186人、大阪教区内では19人の女性が住職に就任し、活躍されています。しかし、多くの男性住職の中の女性ということには変わりありません。ご存知の通り教区会・組会を見渡しても男性が大勢です。

大阪教区「男女の平等参画を考える実行委員会」で女性住職の声を聞く場を設けようと企画したのが「女性住職の集い」です。通年テーマを「ちよつと聞いてえちよつと教えてえ」とし、日頃の法務の疑問からお寺の運営に至るまで、寺院生活の話を中心に参加者同士で語りあう場としました。参加の呼びかけは、女性の住職・代務者、将来住職就任を

考えているかたに声を掛けていきます。

毎年、講師と内容・テーマを実行員会で参加

者の意見を取り入れながら検討しています。これまでに税理士を招いて「宗教法人税務」、絵本を題材に「絵本から味わう僧伽」など色々な角度から講師を招いています。また、本山から解放運動推進本部「女性室」スタッフの中川和子さん（三重教区常願寺住職）にアドバイザーとして参加してもらっています。

今年度は、真宗大谷派参務・解放運動推進本部長の草野龍子さんを招いて「教団の中の女性」をテーマに、ご自身の歩みを通じた話をしていただきました。女性室スタッフの中川さんからは、女性室制作「女と

男のあいあうカルタ」（ジェンダーカルタ）の紹介があり、実際にみなさんとカルタ取りを行いました。研修会終了後には講師・参加者・実行委員の交流の場として懇親会を催し、ざつくばらんに楽しく過ごしました。

参加者からは、「集い」は開き続けてほしい、場が開かれていることが日頃の法務の力になるとの声をいただいています。実行委員会としても、委員一人ひとりが「場を開く」ことの大切さを「集い」を通して感じています。

（第21組西願寺・藤原 勲さん）

第45回大阪教区同朋大会

研修・講座部

さる5月11日（土）に難波別院本堂を会場に、教区教化委員会・研修講座部主催の第45回大阪教区同朋大会が開催され、約1300名が参加されました。

教区基本テーマ「集おう いのちのサンガ」を大会全体のテーマとし、「あなたの居場所はどこですか？」をサブテーマとして、ご門徒の意見

発表のあと、真城義磨さん（四国教区善照寺住職）のご法話をいただきました。

まず意見発表では、大阪教区第12組唯稱寺門徒の橋本隆夫さんに発表いただきました。橋本さんは東西両本願寺から寺号を認められた東西両派立合たちあひ寺院としての唯稱寺の歴史を紹介され、また自らが出遇われた前

教区事業のご報告



門徒会長、前任職、現任職の三人の方々のお話を交えながら、彼らとの出会いによって自らの居場所をいただけたこと、また「寺族」と門徒が協力して寺院を支えていく大切さを語られました。発表後、参加者からは「寺院と門徒の関係性が薄れていくなか、関係が強い唯稱寺が羨ましい」「お寺のために一所懸命尽くされる姿に頭が下がる」などの声が多く寄せられました。

続いて真城義磨さんをご講師と

して、「あなたの居場所はどこですか」をテーマにご話をいただきました。法話では居場所を求めながら「個」へと閉じこもりうとする、つなかりを求めながらも煩わしさを感ずるなど、現代社会の傾向を例にあげながら、「居場所」とはそれぞれの場所では他者と関わりを持ち、認めあいながら安心して共に生きられる場所であると、お話されました。

同朋大会全体を通して、参加者からは「目の前の小さな居場所を大切

にしようと思った」「自分の居場所を考えるときに『共に』という視点が抜け落ちていたことに気づかされた」など、多くの意見がアンケート等で寄せられました。いただいたご

組門徒会研修大会

さる6月18日(火)、各組門徒会員約250名が参加して組門徒会員研修大会が行われました。

それぞれ午前と午後の2班に別れ、真宗本廟と天台宗青蓮院を参拝いたしました。

青蓮院は、宗祖親鸞聖人が9歳で得度を受けられた場所、境内には聖人のお髪が納められている植髪堂があります。

本山では両堂を参拝し、大寝殿及び白書院にて昼食をいただきました。昼食後は、阿弥陀堂で参加者全員でお勤めをし、その後、視聴覚ホールへ移動し木全和博参務による法話を聴聞しました。

また、本山職員の案内による御影堂門や能舞台を中心とした諸殿拝観が行われ、普段下から見上げる御影堂門にも登り、安置されている釈迦

意見を参考に、次回以降の同朋大会がさらに「寺族」、門徒が共に学び考える場になるようにしていきたいと思えます。(教務所)

研修・講座部



如来、弥勒菩薩、阿難尊者の三尊像を拝観いたしました。

参加者からは、「本山の歴史を詳しく知ることができて、大変充実した研修となった」という声を聞くことができました。(教務所)



出向く教化のご紹介

得度受式後講習会@八尾別院

儀式法要部

さる3月26日(火)、大阪教区教化委員会「儀式法要部」にて「得度受式後講習会」を開催いたしました。同講習会は、得度を受式した子どもたちが僧侶として歩むことの大切さを確認するための会として、得度受式後から満15歳までを対象に、毎年3～4月に講習を行っています。

今回、舞台となったのは、大阪教区内にある八尾別院大信寺。当日は本堂のお給仕体験や、諸殿見学、バーベキューなど盛りだくさんの内容となりました。特に盛糟(もそう)を使ってのお仏供作りは、11合ものお米で作る大仏供に子どもたちも大喜び。「まだまだ入るぞ」「こんなに食べられない」と、和気あいあいと語りながら作っていました。その後は別院の大きな仏具で実際にお給仕を体験し、自坊の仏具と比較して関心を持った

り、初めて見る仏具の使い方を聞くなど、お荘厳を通じて学びを深めていました。また、皆で作ったお仏供は、最後にバーベキューで「焼きおにぎり」にして美味しくいただきました。参加した子どもたちからは、「大きい仏具は迫力があってすごかったけど、お給仕は難しかった」「難波別院以外の別院があったのをはじめて知った」「バーベキューが盛り上がった」などさまざまな声が聞こえてきました。

「得度後講習」と聞くと講義や座談など、子どもたちにはちよつと難しい内容ではないか?と感じますが、過去には「本山内陣参拜」や「難波別院宿泊研修」など普段は経験できない貴重な企画をはじめ、今回のようにバーベキューを楽しんだ年もありました。これは、毎年スタッフ

が講習会を企画する際に、「僧侶として歩むことの大切さ」を念頭におきながら、さまざまな体験で仏法に触れてほしい、また僧伽として同じ道を歩む友人と仲良くなつてほしいという願いが込められているからです。そして私たちスタッフも子どもたちに教えつつ、教えられつつ繋がりを深めていくことができます。

聖典講座@天満別院

研修・講座部

今年2月から5月までの全4回、大阪教区教化委員会「研修・講座部」主催による聖典講座が開講されました。今年度は「釈尊を説いた経―大乗仏教入門―」をテーマに、大谷大学の織田顕祐先生にお話いただきました。

聖典講座開催を知らせる事前の案内には「お経ってむずかしそう……、何が書いてあるのかわからない……」といった人にも親しんでい

何年後、何十年後どこかで会ったときに、「あ! あのと一緒にならな!」とか「八尾別院の大仏供一緒に作ったな!」と言ひ合える仲間になれたら、本当に嬉しいことです。今後も、教区内の別院を訪ねてそれぞれの特徴を生かした講習を行うなど、様々な企画に挑戦していきたいと思ひます。

(第4組阿弥陀寺・吉川 遊さん)

ただけるようにと書いてあったので、分かりやすい講座なのだと思います。楽しみにしていました。

先生の講座では、まず「仏教は釈尊(お釈迦様)から始まったのか?」という視点から「釈尊が説いた経」と「釈尊を説いた経」の違いについて話されました。「お経に釈尊が説かれている」というのは、いったいどういう意味なのかと惹きつけられました。

前さきを訪とづらう・第一回



稲垣俊一いぬがき しゅんいちさんに聞く

大阪教区教化委員会の新しい体制が始まって、3年目を迎えようとしています。そんな中、一度この時点で私たちが行ってきた教化活動を原点から振り返ってみるのも大事なことでではないでしょうか。

願いを持って教化にかかわってこられた諸先輩方をお訪ねし、その思いをお聞きする新企画「前を訪う」。第一回は第17組徳因寺前任住職、稲垣俊一さんです。

同朋会運動は点検総括

昭和52年に教化センターの主任になりました。教務所長が竹中素仁さんから三浦了さんになるときに、どうしてもやってもらいたい。なぜかという、今までのセンターはリンクタンクだった。よいものを作っているし、よい先生も来られている。

しかし、さらに同朋会運動の推進のための拠点、本部になってほしいと。それで「何しまんねん」って言うたら、三浦さん、「新聞でも読んでてくれなはれ」って言うてはったけどね（笑）。しかし何もしないわけにいかんし、10年間の同朋会運動の点検総括したんです。『南御堂新聞』に10回にわたって執筆しました。

同朋会運動とは、点検総括なんです。これをしなかつたら運動ではないんです。ただの教化事業になってしまう。運動という言葉も初めて使ったぐらいでしょう。真宗に運動があるのかと、今でも批判はあります。でも、この運動ということが大事なんです。

安田理深先生のお言葉に「真実に触れるとき人間に運動がおこる。法に触れるとき機に自覚的回転が起る」。そうそう。自覚的回転。まあ、安田先生は難しいけど、我々をえぐするような言葉で教えてくださっています。

主任を拜命してこう書きました。「自ら問い直すほかにないことを知らなければならぬ。自問していく動き、すなわちそういう信仰という

作業だけが人間の生命を回復していく最後の手がかりになるに違いない」。

ここに「作業」と書いているように、教化センターは作業所なんです。点検総括の作業をする。いろんな人に来てもらってもやるし、組へ向かっても行く。センターは作業所だと考えていました。今はそんなこと考えないでしょ。教学の研究と人材養成とかでしょう。

公の立場で、自分たちで作業するということが、信心獲得なんです。個人ですが、場が与えられていく。みんなのところへ顔を出して自分の意見を述べる。自問自答する。そういう作業所への変革を考えました。

公開の広場に立つ信

また安田先生は「信心獲得というは、人間を開くものである」とおっしゃっています。今までは自分にもってあったけども、公開の広場に立つことである。個人というところにおらんわけです。公の場所に、いわば社会におる人です。

一人の中の、あるいは一ヶ寺の中

のというような、そんなことは信心獲得と言わんのやと。公の広場にまかり出るといことが信心。そういう信心を深めていくことが教化だと、そうおっしゃっているのです。これを聞いたときは感動して寝られないくらいでしたね。

公開の広場に立つ信心ということ、私たちははつきりしていたか。なんで本山あんねん、教区あんねんってね、広場のひとつですよ。組もそうですし、寺もそう。自分を広場に開いていくこと、こんな幸せなことはないわけです。こうしたすばらしい教化を言ったのが、純粹なる信仰運動という同朋会運動やったんです。

そやから新しいことをやろうとか、そんなことやないんです。人間はどうあるかということも回復する。信の回復は人間回復やと思うんです。

新しい空間を開く

清沢先生の有名な言葉に「大谷派なる宗門はいずこにありや。大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神

の存する所に在り」とあるでしょう。あるいは「自己の信念の確立の上に、其信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成する」。そういう有名な言葉がありますでしょう。

西谷啓治先生は『清沢先生と哲学』で、清沢先生の教学を「三国に渉る仏教の長い歴史の上からみても、一つの画期的な出来事であった」と評価されます。清沢先生の教学や浩浩洞を画期的なことだったといわれています。なぜ画期的かということ、「画期的ということは滅びに向かつて行き詰まりつつあるものが、未来にいきる可能性を見出し得るような、また過去に於ける全歴史を再び伝統として蘇らせ得るような、新しい空間を開くということである」と言われています。

今ね、仏教が滅びていくと。滅びに向かつて行き詰まりつつあるものが、未来に生きる可能性を見出し得るような、過去の全歴史を再び伝統として蘇らせる新しい空間を開いた。その新しい空間が大谷派という宗門なんです。それをなんと表現するか。さっきは広場と言いましたが、新しい空間と言ってもいい。この清

沢先生の精神によって、大谷派、教区、そして組を新しい空間として蘇らせていく。新しい空間として開いていく。

寺が大きいとか小さいとか、新しいとか古いとか、門徒が多いとか少ないとか……。一万の寺、三万の僧侶があっても、百万の門徒があっても、大谷派なる宗門と言えるのか。大谷派なる宗門は、大谷派なる宗教的精神のところ存すると言われるのです。

真宗教化の グランドデザイン

新教化体制を見る中で、想像ですが、連携ということが難しいと思います。そこで議論する広場、これを具体的にすべきだと思います。私は常々、真宗教化のグランドデザインを作成する委員会が必要だという提案をしています。やっぱりあちこちに任しておくんじゃなくて、教区全

体が連携して、一つに大きく包んでいく、そういう教化委員会ではなくてはいかんと思います。

それと、現代ということを視野にいて欲しいと思います。やっぱり地球汚染など世界的な課題が問われる現代にあつては、人類の生存についてグランドデザインしていくような視点が欲しい。

同朋会運動には現代の課題にこたえていくという意味が、あつたに違ひありません。現代の課題に挑戦するという意気込みが欲しい。同朋会運動発足当初、そのへんにものすごく熱を入れたんです。でもまだ燃え上がっていない。もうちょっと体温上げてもらいたいです。

なぜならば共通の課題が見いだせていないからです。大阪いうたらコレや、大谷派とゆうたらコレやという課題です。そしてその課題を克服していくようなグランドデザイン、グランドテーマが必要だと思っております。

(文責・しゅらりん編集部)

全文は教区サイト「銀杏通信」でご覧になれます。

<http://www.icho.gr.jp/shararin/inagaki>



連区の有志坊守でお寺を男女の出会いの場に

昨年2月、近畿連区坊守研修会の座談の中で、「せつかくのお寺の後継者に伴侶が居ない」、そんな話題が持ち上がりました。そして、ご門徒さん宅でも同じような悩みをかかえておられることは、どの地域でも明らかなことでした。「お寺の未来を憂いているばかりでは始まらない！ 私たちで出会いの場を提供出来たらー」そんな熱い思いで発足したのが、「てらこんネットワーク」です。（以下「てらこんNW」と表記）

自発的に集まった10数名の坊守と女性住職。それは、山陽、長浜、京都、四国、大阪と各教区に有志がもれなく揃う、という嬉しい偶然からスタートしました。しかし、普段から多忙な坊守たちが、互いの距離を超えて連絡を取り合うのは、数年前な



お寺の未来

ら不可能だったかもしれません。この不可能を可能にしたのが、スマートフォンアプリ「LINE」でした。私たちは、自坊の仕事の合間を利用して、LINEですべての相談と決定をしました。1日のLINEのやり取りが150通近くになることもありました。そして発足からわずか3か月後の5月に、京都・東本願寺前の東光寺さんで、お寺が男女

の出会いの場、第1回の「てらこんNW」が開催されました。

寺族の若者を中心に参加者およそ20名。その後毎月開催され、大阪・天満別院さん、山陽・大圓寺さん、京都・東光寺さんを会場に、いずれも40人を超える盛況ぶりでした。日程としては、まずお寺で2時間の自己紹介とお話しタイムをもうけ、その後、レストランなどに移り懇親会です。自然と盛り上がる若い男女の熱気に、世話役の私たちがさえ、高揚感が引き出されるような不思議な感覚に陥ります。てらこんに参加したことで「自分の中の何かが変わった！」という人は多かったです。それほど人と人との出会いはエネルギーを生み出すものですね。

現在、てらこんNWは8回を終え、参加者は、のべ290人を超えています。定員を超えたため参加をお断りした回もあれば、お寺に迎えたい方・入ってもよい方の人数バランスが合わずに中止にした回もあります。「今まで行った他の婚活パーティより、てらこんNWが一番楽しかった！」「坊守さんたち、とても親身になってくれている」などの嬉しい意見も多く聞けました。とは言え、毎回、

参加者を募るのに苦労をしていることも事実です。昨年11月からは、近畿連区の全教区において、チラシの全寺院発送を協力していただけました。チラシ制作費がかさむため、山陽教区からカンパ金、その後、四国教区から助成金も頂戴しました。しかし、チラシを送るだけではだめだということも学びました。今は色々な場でPR活動もしています。

最後になりましたが、今年3月に1組のカップルが結婚成立されました。他にも数組の方々が結婚前提の順調な交際を続けておられます。私たちも自分のことのように嬉しく感じています。引き続き、お寺の未来が明るくなるよう、てらこんNW世話役一同がんばっていこうと思います。

（てらこんNW世話役・

上本賀代子さん）

未来仏事研究所

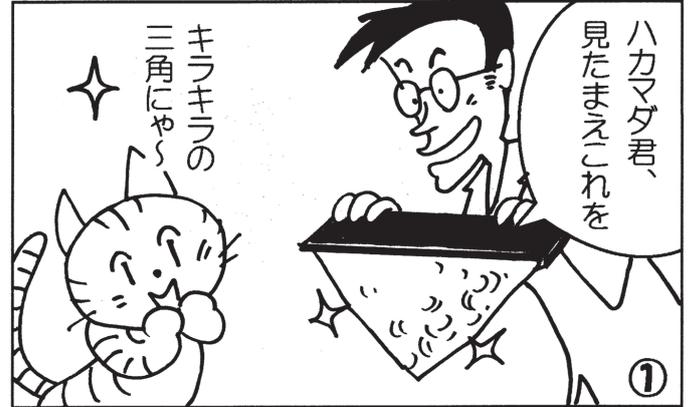


打敷の作法



ハッ！また、
あんたの仕業か！
貸しっ！

⑥



ハカマダ君、
見たまえこれを

キラキラの
三角じゃ

①



電動式
打敷だ

さうさうさうの
おはあちゃんので
実験してみよう！

三角が出たり
入ったり！

②



ピッ！おつ、引つ込むんか
ピッ！おつ、柄違いが出てきた
ピッ！今度は、夏物やな...

⑦

打敷はなあ 平生の
お飾りには外しとくんや
年忌法要、お彼岸、お盆、
お正月、それに報恩講...
特別な時にお飾りするんや



エエやないか
これ...
便利や...

⑧



おじいさん
おとなりの
山本さんから
おはぎ
もらったよ

③



そもそも打敷は
お釈迦様が説法される時に
下に敷いた敷物が
起源やと言われてるんや

⑨



か、勝手に
打敷が
出てきた！

④



やっと成功した〜！

商品化に向け
クラウドファンディング
ですね！

作・廣瀬俊 / 画・上本賀代子



『死を見つめる心』
著・岸本英夫
講談社文庫

紹介者：久世見証

宗教学者の岸本英夫氏が、アメリカで客員教授在職中にガンを宣告されてから10年間に発表された10編の著述集。「色々の宗教を外側にたって研究することを専門としている学究」であった氏が、宗教学者として、現代人をして、死といかに対峙すべきかを問い続けた格闘の記録です。

ガンというような思いもかけない病気のために、「生命飢餓状態」に置かれた氏は、死とは何かを真摯に考え続ける。死後の理想世界はないのだと心に決めた氏にとって、死後の世界は真黒の暗闇であった。そして、死を自身の中で再定義し、そこから出発していく。

現代人が、その理性をもって死に直面したとき、どのように振る舞い得るか。実際に死に直面した人が、その身をもって示した一冊です。氏が亡くなられた1964(昭和39)年刊行ながら、遜色なく現在の私たちに問いかけます。



『バッテリー』
あさのあつこ・著
角川文庫

紹介者：石谷弥恩

同じ人間なのにここまで自分と違うのか、と思ったことはありませんか。血の繋がった兄弟や親でさえ意見が一致せず、喧嘩や事件になってしまうこともあります。

この作品は完璧主義で鋭利なまでに野球一筋の主人公巧^{たくみ}を中心に、兄とは正反対で体が弱く、おっとり優しい弟の青波^{せいば}、そして巧がバッテリーを組む友達思いの豪^{ごう}、さらには少年たちを取り巻く大人の心情をベースに描かれた小説です。「自分の思い通りにならない」思春期特有のもどかしい気持ちや葛藤、それぞれの問題と向き合い成長していく姿に相手を理解する難しさと思いやりの心とは何かを考えさせられます。バッテリーとは投手と捕手のペアのことをいいます。他人との関りを極力避け、個人主義の強くなった世の中で、バッテリーのように素直に人と真向かいになることを忘れていた今、もう一度読み返したい作品です。

他の委員のおすすめ本は順次「銀杏通信」に掲載します！

発行日：2019年6月30日

発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人：宮浦一郎

編集：大阪教区教化委員会
広報・出版部
(実) 広報コーディネート

<http://www.icho.gr.jp/>

編集後記

教区教化委員会が新体制に変わって早いものでもう二年◆実際に事業をまわしてみると、さまざま

問題点も見えてきたようです◆新企画「前を訪う」で稲垣俊一先生がおっしゃるように、やはり自らを常に点検し、総括することが肝要ではないでしょうか◆当誌も教化委員会の動きを詳らかにみなさまにお伝えしていかなければならないと、改めて思った次第です◆そのためにも次年度より発行を年度末の一回にし、ページ数を大幅に増やして、詳細に教区の活動を広報していきたいと思っております。新生『しゃりん』をどうぞお楽しみに！(澤田)